

肺腫瘍

C会場(15:10～15:50)

座長 千場 博(熊本地域医療センター)

C16. 多発性肺腫瘍影で発見され胸腔鏡下肺生検で診断された Silica nodules の一例

大分赤十字病院内科

吉松哲之

同外科 福澤謙吾

同放射線科 上野真一郎

症例は60歳男性・理容業・検診の胸部X線・CTで多発性肺腫瘍を指摘され、精査治療を目的として当院入院となった。当初転移性肺癌が疑われたが、頭頸部・腹部のCTでは癌病巣を検出できず上部下部消化管ともに異常なかった。CTガイド下の肺腫瘍針穿刺細胞診では良性悪性の鑑別困難で経気管支的肺生検で腫瘍に到達できかった。過去(平成7年)の検診フィルムに同様の多発性結節影が認められ、良性肺腫瘍を考えたが、クリプトコッカスや結核腫の可能性が否定できず、胸腔鏡下肺腫瘍切除術を実施した。その結果、内部に石灰化を伴う均質な無構造物質を主体に周辺をリンパ球や異物巨細胞が層状に取り巻く異物肉芽腫の組織構築を示し、silica noduleと合致していた。病歴で当初は確認できなかったが、17歳頃にトンネル工事に数ヶ月従事した経験があったことが後日判明した。

C17. 微少肺病変に対するCTガイド下マーキングの有用性

長崎大学医学部放射線科

中島一彰、芦沢和人、福島 文、松山直弘

林 秀行、長置健司、坂本一郎、林 邦昭

経気管支肺生検やCTガイド下生検にて診断が困難な微小肺病変に対して、胸腔鏡下に病変の摘出が行われる機会が増えてきた。しかし標的となる病変が小さ過ぎる場合には、胸腔鏡下に病変の位置を同定することは容易でなく、術前のマーキングが必要となる。我々は、術前にガイディングマーカーシステム(八光商事)を用いてCTガイド下マーキングを行った5症例を経験した。

これらの症例を呈示し、CTガイド下マーキングの有用性について考察する。

C18. 肺癌診断における Dynamic CT の有用性の検討

国立病院九州がんセンター呼吸器部
麻生博史、牛島千衣、北島正親、福山康朗、
山口正史、照屋孝夫、一瀬幸人
同放射線部 藪内英剛

目的 肺野腫瘍影やリンパ節の内部情報を Dynamic CT (DCT) を用いて解析し、その診断やリンパ節転移の鑑別に応用できないかを検討した。

対象 肺野病変の検討は DCT 後に確定診断がついた症例とし、リンパ節転移の検討は肺癌症例で術前に DCT を行い、術後に転移の有無を確定できた症例とした。

方法 肺野病変は造影剤注入前と後 30 秒、60 秒、90 秒、120 秒に、リンパ節は注入前と後 1 分、5 分に scan した。CT 値の測定は肺野腫瘍では ROI AR 48.2、リンパ節では 20.1 に固定して測定した。

結果 肺野病変は 22 例(肺癌 18 例、肺炎 2 例、結核 1 例、肺膿瘍 1 例)であった。CT 値は前/30/ 60/ 90/ 120 秒で肺癌では 38/ 46/ 64/ 61/ 61、非癌では 42/ 53/ 68/ 72/ 75 (HU) であり、有意な差を認めなかった。リンパ節は 23 例(腺癌 12 例、扁平上皮癌 10 例、小細胞癌 1 例)の計 46 個(転移有 19 個、転移無 27 個)を検討した。CT 値(造影前/ 1 分/ 5 分)は、転移有で 42/ 80/ 76、転移無は 36/ 62/ 56 であり、転移有は無と比べて 1 分、5 分で有意な上昇が認められた。

結語 DCT は、肺野腫瘍影の診断で肺癌と炎症性疾患の鑑別には有用性を認めなかったが、肺癌症例のリンパ節転移の鑑別には有用である可能性が示唆された。

C19. 2cm 以下の肺野型肺癌の検討

長崎大学熱帯医学研究所内科
土橋佳子、大石和徳、永武 毅

対象 平成 7 年 4 月より平成 12 年 3 月までの 5 年間に当科入院となった肺癌患者 105 名のうち長径が 2cm 以下であった肺野型肺癌 14 例について発見動機、組織型、stage 分類、確定診断法などについて検討した。

結果 14 例の内訳は年齢 43 ~ 79 歳(平均 67.4 ± 11.2 歳)で男 7 例、女 7 例。喫煙歴は男性は全員に見られ、平均 BI は 824、女性は 3 名で平均 BI は 367 であった。病変の大きさは最小のもので径 1.0cm。CT 発見肺癌の 2 例を除き病変は単純胸部レ線で見逃し可能であった。発見動機は肺癌検診 2 例、医療機関の定期検診 5 例、偶然的検査 7 例。組織型は 10 例が腺癌、1 例が腺扁平上皮癌、2 例が扁平上皮癌、1 例が小細胞癌であった。喀痰細胞診で陽性となったものが 1 例、TBLB で診断確定したのは 3 例で、7 例は CT ガイド下肺生検で確定。外科手術によるものは 3 例(VATS 2 例、開胸手術 1 例)であった。14 例中、stage IA が 11 例のうち 10 例が外科的切除を施行しえた。

結語 小型の肺野型肺癌は画像上、良性疾患と鑑別困難で、TBLB による確定診断不可能な場合も多い。その場合確定診断には CT ガイド下肺生検や、VATS が有用であった。